

日本語の一人称代名詞

三宅 鴻

この稿では、いわゆる「ヨーロッパ」の言語の専攻者が関心をもつと推測される、日本語の諸種の一人称単数代名詞につき考察を試みようと思う。もとより筆者は日本語を専攻せぬ者であるから、不十分な点や見当はずれもあるかと思うが、それは御許しをお願い申し上げたく、また参考文献を十分に参照することもできないが、これも御寛恕をお願いしたく思う。

現代日本語の一人称代名詞について、周知の特色を次に列挙してみたい。

(1) 種類がきわめて多いこと。のちにリストを掲げるが、「わたくし」「わたし」「ぼく」「あたし」を始めきわめて種類が豊富なことは、原則として一語しかないあまたの印欧語の例と比べて、きわだった特色をなすことは、述べるまでもない。

(2) しかも、一語ですべての場合に違和感なく用いる語が一つもないと想定されること。このことは(1)と相俟って、一人称代名詞の使い分けをきわめて厄介な事柄とするに十分である。

(3) 歴史的に見ると、日本語の人称代名詞は、話し手をさすもの(いわゆる一人称)は始めは卑下であったものが、次第に尊大となり相手を見下すような意味合いを生じ、一方話し相手をさすもの(いわゆる二人称)は、元来は相手に対する尊敬を表わしていたものが、結局は相手を見下すものになったりぞんざいなものになる、という一貫した傾向をもつ。このことは始め佐久間鼎氏によって昭和12年に指摘されたと言われるが、鈴木孝夫氏(『ことばと文化』岩波、昭和48年)によって一般化された。鈴木氏はこれを「タブー型変化」と呼ばれる。しかばなにゆえに、一、二人称代名詞がタブーなのかという問題が残る。

(4) 鈴木氏が前掲書でおそらく始めて指摘されたことであるが、たとえば小学校の先生が児童に向かい、「先生の言うことを聞きなさい」のように、自分のことを「先生」と呼ぶ。あるいは父親が、息子に向かって自分を「パパ」と呼ぶ。これはきわめて重要な特色である。これについては、(i)親族的資格の語、(ii)職業的資格の語、(iii)虚構的親族資格の語、(iv)実名の語(自分をさして「これ明美に下さるの」など)、と分けることができよう。これらを総称して鈴木氏は、一人称、二人称に対して自称詞、対称詞と呼ばれることもよく知られていると思われる。とにかくこの用法が、純粹の一・二人称代名詞を圧して多く用いられることは明瞭である。

(5) 前二項を圧して、一人称代名詞・「自称詞」を用いず「とワタクシハ思う」の代りに「と思う」と言うような用法、つまり一人称・自称が暗示されている用法が、きわめて多いこともこれまた明らかである。もとより周知のごとく、ラテン語においては一人称単数代名詞のごときは通例省かれ、また西本晃二氏によればイタリア語、スペイン語においても、それとわかる場合はイタリア語 *io*、スペイン語 *yo* は省かれると云うが、これらでは動詞の活用により、一人称単数たることは明瞭であると思われ、日本語の場合と同一視することはできない。

日本語の場合に一人称の抑圧に至る要因は、これを単純に想定することはできないが、いま仮りの常識的要因として、次の三つを挙げてみたい。

(1) 動詞(および日本語では「陳述」をなしうる形容詞・形容動詞)が、人称と数に関し、

西欧語のようなコンジュゲーションをしないこと。これはかなり決定的な因子のごとく思われる。もし西欧式活用があるならば、Iに当たる語を略しても、容易に補うことができ、削除されている代名詞は容易に想定できる。英語のごとく、人称、数による変化のいまでは少ない言語でも、Thank you = I thank you, Seems he likes it = It seems he likes itのごとく、補充はほとんどつねに明瞭で決定的である。

(2) 日本語では自分と対者の別が必ずしも常に明瞭でないか、少なくとも明言されないことが少なくないこと。I love youに当たるもっとも日本語らしい表現は、「好きだよ」か「愛しているよ」であろう。こういう場合、ほかのだけれが、相手以外のだれかを愛していると、言うわけがないということのみを手がかりに、この表現が成り立っている。このように日本語は、場面的特徴を言わずにすませることが少なくなく、それでふつうはすませされており、ことさら荒立てようとする場合を除いては、話者聴者双方にとり不都合は生じない。だれが、だれを愛しているのか言わない日本語のこの習慣は、慣れない外国人にははなはだ不安に思われようが、それで日本人の通常の伝達が成り立っているところを見ると、はなはだ察しにゆだねることの多い言語だということがはっきりする。しかも、これは標準現代語ではないが、ワレとかオノレとかいう元来の自称が、対称としてあることを見ると、なにか一・二人称の自在な交換が成り立っているように見える。自分と、相手というものはっきり区別する西欧語話手から見ると、思いもよらぬ融通性に見えるであろう。しかし、日本語においては、これを母国語として話す私自身が、そして同じくこれを母国語とされる読者諸賢が、だれよりもよくご存じのように、大部分の場合に人称代名詞を省いても、混乱は生じない。このことは、日本語が案外、経済的な言語ではあるまいかという可能性をすら生じさせる。

(3) さらに言えば、日本語においては少なくとも現代、この個の主張の時代にあってもなお言語の性質として、ワタクシという語を多用するとなんとなく押しつけがましくなり、さらに二人称に至っては、もっとも丁寧なはずのアナタすらも目上に向かっては用いることができないという不便さがある。これは今に始まったことではないらしく、国語学者佐竹昭広氏の指摘によると、万葉の「心ゆもあは思はずき」(ワタクシハ、思ッテモミナカッタ)が新古今ではたゞ「思はずき」となっていると言う。上古においてワ、ワレ、ア、アレというような語は何でもなく用いられているように思えるが、その潤達さが失なわれて久しいと見るべきかも知れない。

それはなるほど、英語においても論文を書く場合に、いきなりIから始めてはいけない、I consider it importantであればIt is considered importantと言うようにと言われることがよくある。たしかに論文ではit is believedとかwe have seen above(上記のごとく)のように、受動で言ったり一人称複数で言ったりすることが屢々要請される。しかしながら、日本語ではおそらく英語よりずっと大きい程度で、「わたくし」の類の単語を用いることが危険を伴なう。もとより、長い論文や手紙に一切「わたくし」類を用いないことも心掛ければできないことではない。しかし、本来自分の意見をパブリックな席で語るべき物書きにとり、「わたくし」の類を禁手とされるのはいかにも辛い。学術論文の目的をはなれた実践の問題であるとはいいいながら、現代日本語に抵抗感の少ない一人称単数代名詞が生まれることを待ちのぞんでおきたい。

*

いま、権威ある表として、国立国語研究所編『分類語彙表』(1964, 秀英出版)によ

り、いわゆる「一人称単数」の日本語代名詞を並べて、ひとつおき考えてみることにする。

1. 「我」。これは今日、ワともアとも読まない。(わずかにワガという形が残る、アガは消えた。) 我はワレと読むと思う。わたくしが生後始めてこの語に接したのは日曜学校の聖書講読は別として、「ワレは海の^{しらなみ}子白浪の」という小学校唱歌であった。このワレという語はわたくしには、I というより I myself つまり自分自身という語感が強い。ワタ(ク)シミズカラとは言わず(言うとすればワタクシハミズカラと言う),むしろワレミズカラという。また、「ワレを忘れて」(忘我)とか、「ワレと進んで」とか言うのをみると、これはアイではなくて「みずから」のことになっているように思われる。多くの外人は、日本人がマイカーとかマイホームとか言うのを聞いていぶかしがる。つまりこれは、日本語で言う「ワガ」がマイであると日本人が思ったからで、従って「あなたのマイカー」のように言う。いつか外人が、テレビのコマーシャルで「あなたも my bowl をもちましょう」というのが断じておかしい、your bowl でなければならぬ、と私に語った。もし建築業者が住宅を宣伝するとすれば、必ず your own private house とならぬ(home を house の意に用いるのは向こうに例のあるコマーシャル英語)。わたくしはハワイの日系人が、ミーとかユーとか言うのを知ってむしろ笑えない。かれらは本能的に、本当の意味では日本語にアイとユーが欠如しているのを知り、かつ西洋の生活はこの自・他の通称がないと円滑に運ばないことを知っているものと思われる。もとよりこれは、わたくしが日本語でミーなどと言うということではないけれども。

2. ワタクシ、ワタクシ。ふつう挨拶状には自分のことを「私儀」と書き、小活字にする。これを、シギと読んだ国語教師がいたが、これはワタクシギとよみ、「わたくし一人の私事ではございますが、つまらぬことではございますが」という意である。たゞ自分を謙遜するといふだけならば、英語にも I'm nobody (つまらぬ者です)とか nothing very good (たいした者ではありませんが)というような表現がないではない(He thinks he's somebody とは「野郎思い上がっていやがる」ということである)。それよりも、ワタクシ(私)とは本来オオヤケに対することばで、(one's own) private affairs ということであろう。これは武家政治になってからそうなったのかどうか知らないが、とにかく日本語では、いまなお、オオヤケのことはすべてに先行し、ワタクシゴトなどというのは二の次どころか百の次になりそうなのが、偽りない日本の姿である。それに対抗するために「マイホーム」といったことばが案出されたのであろう。ある時会議のあとで外人に、公務のことで相談しようとしたら「家内に会うから」と言ってさっさと帰ってしまい、あとで私は、こんなことを日本の会社で言ったら、どなりつけられるであろうと苦笑した。(だから、学校でも国公立と私立と書けば、もう文字の上だけからも勝負にならない。)オオヤケの世界における自分というもの、どう定位したらよいのであろうか。ある人は、「ワタクシメはしがたいゴガク教師でござります」という、かなりいや味な文章を発表した。まあしかしありようはその程度のことなのであって、ワタクシとは、価値がまったくゼロの一個の private person のはしたない考えにてはござりますが、というにすぎず、それを真正直に書くとワタクシメとかワタクシゴトキとかなるのである。それをひとがどう評価するかは、大体は肩書次第である。米人と会って話をするときには大体、どこの出身でどういう種類の仕事をしているかというようなことであろうが、日本の場合はどこに「所属する」ということである。この「所属」というのを直訳して日本人は belong to という。

I belong to Mitsubishi のようにである。外人はこれをおかしがり、それは I work

for～である、という。ということは語感からして、「……のために働いてやっている」ことになり、日本ではぶっとばされるであろう。日本のは組織丸抱えなのであって、威勢の良いことを言ってみたとて出来ることかどうか、ちょっと考えてみれば分ることである。

ワタクンたちというのは、私は日本語の専門家でないからよく知らないが恐らくきわめて新しい言い方であろう。元来これは、ワタクンドモであるはずである。アナタドモとは言まい。ドモとは、良く言えば謙譲のことば、はっきり言えば卑下のことばである。だからワタクンドモとはテマエドモということで、相手をふつう含むはずがない。その点で、多くの場合のウィーと違っている。(ワタンラというのは、あまり標準的な感じではない)。

それに少しつけ加えれば、ワタクンとは改まった表現であり、ワタクンゴトを敢て公言するといったようなひびきをもち、少々ことごとしい。それにくらべてワタンは、それほど物々しくない。「私事」はワタンゴトとは言わず、「私儀」はワタンギとは読まず、ワタクンメはワタンメとは言わず、ワタクンたちだけはワタンたちとも言う。ワタクンとワタンとは、大体は微妙な使い分けがあるらしい。

女性は、ワタンおよびアタンという、ワタクンほどは堅固しくもなく、かつまた、あまりワタクンゴトといった、非公共的なひびきの少ない一人称をもって、かなり救われている。奇妙なことに、男性がワタンと言う場合につき考えてみると、たとえば「(男)ワタクンにこれを下さるのですか」「(男)ワタンにこれを下さるのですか」と並べてみれば、ワタンの方が略式で、かえって偉ぶっているようにワタクンには聞こえる。「ワタクンにはそうは思えません」と、「ワタンにゃあそうは思えません」とを比較せられたい。ところが、女性がアタンと言うと、これは却って愛嬌にきこえ、男性のいうアタンのもつ簡略さはない。女性はふつう、友だち同士ではアタンを用い、改まってはワタンと言うようである。女性が「これをワタンに下さるの」と言った場合につき考えてみるに、もしワタクンと言え、ば、「これをワタクンに下さるので(ございま)すか」となろう。いまの日本語ではwの音は弱くなっているから、早口ではワタンかアタンか聞き分けられないことがある。

3. アタン。今は大体、女性語であろう。落語家が、男の声色で「アタシヤ」というと、これは古典落語で、年輩の大家が説教でもしているようにきこえる。今の標準語では、男はあまりアタンとは言わなくなったのではないか。

4. アッ。これはほとんど職人に特有の語であろう。アッシャアと用いる。

5. ワッ。『新明解国語辞典』には省いてある。言うとすれば職人の親方の感じ。アッンと並んで、むろんワタンの転であろう。

6. ワッチ。これはわたくしは実際に聞いたことがない。『岩波古語辞典』には、「本来奴詞で、元祿頃から女性にも用いられ、近世後期には江戸^{よしわ}吉原の遊女の用語として有名」とある。ワチキは『分類語彙表』にはないが、『新明解』には江戸時代の遊女語としている。

7. ワン(僕とも書く)。これはワタクンの中略。『新明解』には、「男性の老人または力士などが「おれ」よりは少し改まった気持で使う」とある。「ワンの若い頃は」が代表的であり、力を入れて言っているような感じである。わたくしの亡父はたゞ一度、私の身の振り方について「儂は」と書いて来た。日常はオレを私どもには用いていたから、たしかに「改まった」感じがした。

8. ワテ。私は講談や読み物以外では聞いたことも読んだこともなく、自分では決して用いない。『新明解』には方言とある。どういうふうに使われるか、これだけは見当もつかない。

9. ボク。これが問題の語である。元来は Your humble servant という卑称なのであろうが、(1) わたくしの小学生から大学生ごろまでは、これを略式の一人称とし、中学以降、公式にはワタクシを長上や先生に対して用いた。小学時代、私は郊外の学校にいたが、同級には相互につねにボクを用いる者と、同輩間ではオレを用いるグループとに分かれていた。(2) 小学校6年の娘に聞くと、今の小学生の男は先生に対してボク、友人(同級生)に対してはオレという、と言う。してみると近来、一段略式の言い方が一般化したのである。電車の中で中高生の男のことばづかいを聞いていると、オレと言うことが多いようである。わざと乱暴なことばをてらって言っているのか、それともあまり乱暴でなくなっているのか、そこの所はわかりかねる。(3) どうやら、いま50才前後から60ほどにかけての年代の男は、一種の知的な気取りとして、大抵の場合にボクで押し通すようである。私の知る限り篠田^{はじめ}一士氏がそうであり、荒正人氏によると佐伯彰一氏がそうだそうである。荒氏御自身はかって半年ほどボクを用いたと言われた。物書きが窮余の一策としてボクを用いたくなる気持ちは分るが、どうも私個人には、中高年がボクと言うと、オレはまだまだ年取ってはいないんだという、一種のてらいが感ぜられるのは致し方ない。(4) わたくしはボク=しもべという語源を意識したことがない。なお、ボクラもボクタチも、まったく私個人の感じとしてはボク以上に違和感をもたせる。なにやらことさら身を低めているとか、わざと親密に話してやっているとか、ボクラの仲間ではといったclique(徒党)的なニュアンスが感ぜられて、面白くない思いがするが、これは私一人かも知れない。

10. オレ(俺)。わたくし個人は、ことさら蓮っぱに言うときのみ用いる。しかし上述のように今の子は小学生も同輩間に一般に用いるという。『新明解』には、「男が同輩・目下の者に対して使う一人称」とある。私の娘ども(小6, 小4, 小3)は時々家ではオレなどと言っているが、これは男子の同級生の真似をしているのであろう。自意識が生まれたら用いなくなると思われる。成人男子が「オレのたのみを聞いてくれ」などというとき、これはふつう同輩以下に言うのであるが、オレはきわめて適切である。この語は付带的に、自分を気取らずに示すという感じがあるからである。それに対して、「オレの言うことを聞け」というのは、甚だしく威圧的であることは述べるまでもない。

11. オイラ。これは「俺等(おれら)」の転ではあろうけれども、単数に用いて少し自分を滑稽に見せる感じがする。「オイラは天下の道化者」といった時に用いるように思う。私のことばではこれは複数に用いたことがない。

12. コチトラ。辞書には「自分たちの意の俗語的表現」とあり、単数にも用いると言うが日本語の単複は明瞭なものではないけれども、ふつう単数の意で「当方」につき、オイラよりもずっとひょうきんにおどけたときにことさららしく用いる。かつてある女性の文学博士がわたくしにこれをお用いになったが、明らかにふざけおどけた文脈であった。ややあいまいにウィーの意にも用いるかも知れないが、相手は決して含まない。

13. 手前(テマエ)。これはテメエと読めば相手への蔑称になるが、わたくしは自分のことを手前と言ったことがなく、自分らのことを手前どもと言ったこともないように思う。どうしてもこれは、年輩の商人といった感じがある。若い商人が用いた場合、ことさらに仕込まれているといった感じを私はもつ。

14. ソレガン(某)。元来、名のはっきりしない人物(もしくは時に、事物)をさすと『新明解』にはあるが、アイの意で用いたときは、昔の武士などのことばという感じがする。ヤツチャ、ミドモなどと相通うところがある。

15. セツジャ(拙者)。起こりは「つたなきもの」ということであろうが、『新明解』にもはっきり、「昔、ある地位にある人(たとえば武士・医者などが)、「自分」の意で使った謙称」とある。私自身は子供用漫画で、忍術使いかだれかがこれを用いているのを見た記憶がある以外、実際に用いてみたことがない。この語は自分がエリートであることを自覚自認しつつ、ちょうど僧侶が拙僧とか愚僧とか言うように、自分を低めて言っている様子を見せながらも相手との身分の違いを見せつけているように思われる。いまの医者が言うとは思われない。言ったら滑稽である。

16. 小生(しょうせい)。会話で用いると少々場違いという感じで、書簡文用語であろう。『新明解』には、謙称ながら目上に対しては使わないとある。わたくしの旧友で一人、これを好んで用い、また…兄と書く。旧来の書簡文スタイルでは、小生とか、……兄、……学兄は字義に反しむしろ目下に用い(玉案下、机下も同じ、長上には侍史を用いる)、同輩以上には用いないはずである。用法が崩れて来たのであろうが、「小生」は目下に対して用いるのが正格であろう。しかし同輩間で「私儀」というのもことごとしいから、「小生」を拡張して用いているのかも知れない。学生に聞くと深夜放送で用いているという。

17. 予と余。『新明解』によると、余が正字で、予とも書く、とある。漢学の師によると、アマリは余が正字、余は本来は別字、というから「余」はべつに「天下の余計者」ということもないのであろう。「予」は『詳解漢和』によると「アタウ」であり、「予一人」とは天子の自称という。もし「与える人」であるならば、古英詩の君主の別称 *bæga brytta* (宝の配り手)などを想起させよう。とにかく日本語では、予も余も、殿様や領主の自称という風である。『新明解』には、余は漢文スタイルとある。わたくしはむしろ「余輩」「予輩」という複合語として、戦前にこの語を見た記憶が少しある。「わがはい」と異なり、この「ヨハイ」は謙遜と自信の入り交った感じを私はもつ。

18. わが輩(はい)。これをワガトモガラと読めば、「自分たち」の意の漢語的表現と聞こえる。『論語』にたしか、「わが党の直きものは然らず」というのがあり、この「党」は政党ではなく、郷党、つまり郷里のともがら(人たち)である。もちろん、ワガハイは大層偉ぶってきこえ、いまの日本ではこの語を真面目に自分をさして用いる人はあるまいと思われる。いまは、わざとふざけてしか用い得ないであろう。『猫』の表題でも、すでにしてそうなのではあるまいか。

19. 吾人(ゴジン)。『分類語彙表』では「不肖・拙僧・愚僧」の前に来ているが、「私ども」のあとの方が良くはないか。私は「われわれ」の意の漢語的表現にしか用いない。「吾人はすべからく」という感じであるが、漢学の人の話では「現代を超越せざるべからず」は異例、「超越すべし」と言えと言うが、それは「須」という語の読み癖から来ているのであろう。訓読法ということを離れれば、「せざるべからず」でも奇妙ではないように思われる。とにかく「吾人」は、今日でも用い得ることばではあるが、それでも少し堅すぎるであろう。

20. 不肖。「似ズ」である。私個人は「不肖の子」もしくは「不肖私が」としてしか用いる気がしない。謙称としての「不肖」は単独にはあまり見かけない。

21. 拙僧・愚僧。昔の僧侶の自称であろう。時代物で「拙僧が助けて進ぜよう」とでも言う時以外、現代の僧侶はあまり用いるまいと思う。

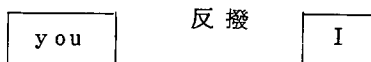
22. みども(身共)。『新明解』には「雅語)自分(たち)。われ(われ)」とある。現代語としては用いられまい。これは『分類語彙表』にもない。

23. やつがれ。これも『分類語彙表』にない。『新明解』には「(雅語)自分の謙称」とある。現代において用いると、却って滑稽であろう。

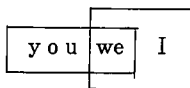
『分類語彙表』では上記 21 までを一人をさす代名詞をみていると思われ(「吾人」につき前記)、以下には「われら、われわれ、わた(く)したち、わた(く)しども」がある。これらは原則として、二人以上につき用いるものである。

※

ここで、「われわれ」と英語のウィー(その他西欧語の一人称複数は原則として同じかと思われる)につき一言のみする。ある説によると、英語のユーとは自分でない人であり、アイとユーの間には疎外と反撥があるという。つまり、仮に図示すれば



はなはだ簡明な図式ではあるが、時には話し手と聞き手の両方を we という場合があるのをこれでは説明できない。なるほど、You are you and I am I というのはありうるが、これはすこし喧嘩腰で、We are all human というようなのが説明し切れない。むしろ日本語のワレワレというのは、あなた方はどうか知らないがワタンタチは、というニュアンスをもつことが多いが(exclusive 'we'), 英語の場合は相手をふくめ、ナンジ、ワレとしての we (inclusive 'we') のことが少なくないのではないかと思う。つまり、



つまり「わたくし」は「あなた」に対して、いま話しかけようとする。わたくしは、あなたがわたくしの言うことに一応は耳を傾け、なんと私が希望するかを聞か、なにを尋ねているかを知らうとするか、であろうと期待する。その時応答があれば、we となる。英語の we の基本は、我と汝であると思われる。私が外人に、私たち日本人という意味でウィーと言うと、それはジャパニーズという意味かと反問されたことが再三であった。よんどころなく、私は日本人のことを they と呼んでみるが、これは奇妙な感じである。もとより未知の相手に対する警戒心というものは、外人は心得切っているが、一方また、たとえば同じ職場で働いていれば国籍の別なく we であると思うべきであろう。その点では日本人の方が、毛色の変った相手に対しては一生涯ガイジンという意識をもち続ける。この「外人」という語はそれ自体軽蔑語ではないのではあるが「外人」としてみれば一種の差別語と思うらしい。この問題はいまはこれだけとする。なお私はかつて何でもない仲の女性に対しうっかりワタンタチと言ひ、なれなれしいことを言わないでくれとどやしつけられたのを思い出した。日本語では男女がワタンタチというのは親密な仲に限るということをやっきりしたのである。最近教室で、学生に対し、もし私が「私たち」と言ったら、この教室の全員と思うか、「私たち教員」と思うかと聞くと、第一感としては後者であると答えた。

英語に paternal 'we' があるのは良く知られている。医者が患者に、How are we feeling this morning? / Now we'll take some medicine と言う如き場合である。これは医者が患者を一体化しようとする努力の表われであるが、日本語に直訳したらおかしいものであろう。日本語では、患者はこちら側で見てもらう側、医者の方は診察治療する側で、日本語では全然立場が違う。日本語のワタンタチというのはウチの仲間のこと

あって、ヨソの人とのいわば人為的つき合いの中で相手を含めてワタシたちということは恐らく考えられない。このウチとヨソという概念が、日本人のつき合いの基本になっている。

×

わたくしは日本語学者ではないから以下は推測であるが、元来の日本語の一人称、二人称は、簡単なものであったかも知れない。アは、吾・我と充てて一人称である。『岩波古語辞典』では、アは親密感を示すとき、ワは改まった気持で向かうときに用いたとある。アが君と、ワが大君の別がそれであるとする。してみるとこれは親密体と丁重体であり、今日のドイツ語・オランダ語・フランス語などの二人称の区別に似ている。二人称はナであったかと思っていたが、同辞典の説ではナは元来一人称、朝鮮語ナ(わたくし)と同源で、それが二人称に転用された、とある。ナレは、親しいもの、目下のもの、動物などに対して用いるとあるから、これは tu, du, オランダ語 jiy [jei] に近い。ナムチは、もとナムチで、わが貴くむつまじき人の意であったというから、これは Sie, vous, オランダ語 U [y:] に当たろう。のち、相手と対等に、または低く見て言う、とある。すると、文献に徴するところをこの辞書で見ると、元来の一人称は、ワ、ア、ナとなる。アはワの頭音脱落であろうし、二人称ナムチは、ナ(吾)・ムチ(貴人)であるから、この説では複合語である。もう一つ、アはまた遠くにあるアレをさすが、これは ka の転とある。すると、カというのがア系、コというのが今日のコ系である。母音の区別ということになる。相手に近いものは s で示すことになる。

×

さて、日本語においては、いわゆる一人称代名詞の代わりに、先生が児童に「先生の言うことを聞きなさい」とか、母親が子に「ママの言った通りでしょ」と言ったりする用法があり、鈴木孝夫氏(『ことばと文化』その他)はこれを自称と呼ばれる。同様に、「先生はスポーツをなさいますか」は二人称代用の対称となる。そのことは鈴木氏に詳しいので、ここではいま、あまり付け加えることがなく、鈴木氏にゆずる。一言のみ付け加えれば、スウェーデン語では、二人称代名詞 du は単数の近親・親友・目下にしか用いず、その複数 ni を単数に用いても敬称にならない。それに代わり、教授なら professoren(プロフェッソン)、陸軍少佐夫人なら majorskan(マヨスカン)としか呼びかけられないようである。これらの人々を、he とか she とかに当たる語で指示することは許されないらしい。ヒーに当たる han(ハン)、シーに当たる hon(フン)は、敬称ではない。この点日本語と似ていて、タイトルを知らないと話に困ると思われる。母親に対しても、Hur mår mor? (How is mother feeling?) と言うらしい。

(1976.8.20)